法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

翻訳 日ソ・日ロ関係に見る戦後日本の外交とアイデンティティー

スヴェトラーナ, ヴァシリューク / VASSILIOUK, Svetlana / BUKH, Alexander / ブフ, アレクサンダー

(出版者 / Publisher)
法学志林協会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Review of law and political sciences / 法学志林
(巻 / Volume)
112
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
206
(終了ページ / End Page)
171
(発行年 / Year)
2014-09

Hosei University Repository

翻　訳

日ソ・日ロ関係に見る戦後日本の外交とアイデンティティー(1)

ブフ・アレクサンダー著
ヴァシリューク・スヴェトラーナ 訳

[翻訳ノート]：

- 本稿は，Alexander Bukh, "Identity, Foreign Policy and the 'Other': Japan's 'Russia'," *European Journal of International Relations 2009* (Vol. 15 (2), pp. 319-345) の訳である。ブフ・アレクサンダーは，ウェリントン・ビクトリア大学（ニュージーランド）・国際関係学部の准教授である。
- この論文は，日ロ関係と日本のアイデンティティーに関する訳者自身の研究領域に直接関係があるだけでなく，日本の外交政策に関する国内外の研究者の間で，非常に高い学術的な評価と注目を得ていることから，翻訳を行ったものである。本論文は，国家のアイデンティティーの観点から，日本の対ロ関係を考察した最初の試みであることに加え，日本の対ロ認識，対ロ外交に関する新しい見方を提供している。更に，本論文は，日ロ関係に関するケーススタディーにとどまらず，国家のアイデンティティーと外交政策との関係の概念化のための国際関係論における既存の枠組みについても，批判的検証を行っている。このため，本論文は，日ロ関係に関心を持つ読者にとどまらず，国際関係論のより幅広い学者・研究者にとっても興味深い論文であると言えよう。
- 本翻訳では，参考資料の個人名，文献名等は，オリジナル（英語）のまま記載している。

本論文は，ソ連・ロシアを日本の「他者」とした場合の，自我と他者の視点から見た現代日本のナショナル・アイデンティティー形成を考察したものである。本論文では，冷戦時代にソビエト連合との関係で日本のアイデンティティ

Hosei University Repository

ーを形成した2つ主な構成要素，すなわち政治および社会文化的構成要素を明らかにしている。本ケーススタディーの前半では，これらの構成要因の源泉と性質を検討する。既存の日本に関する国際関係論の構成主義（コンストラクティビズム）の主張とは異なり，本論文では，日本の戦後のナショナル・アイデンティティーは，国内外の双方に源泉を持ち，現代のアイデンティティーに関する言説の一部は戦前まで遡ることが出来ると論じている。本論文では，また，政治的および社会文化的アイデンティティーは，部分的には重複するものの，それぞれが異なった日本の「自我」の形成に繋がっていると論じている。本論文の後半では，両国間の関係に依然として悪影響を与えている領土問題に特に注目し，これらの異なった自我の形成が，ポスト共産主義のロシアとの日本の関係において，どの様な役割を果たしたかを検討している。

キーワード：外交政策，アイデンティティー，日本，北方領土，ロシア

初めに

国際関係論において構成主義派が登場して以来，それにより戦後日本の安全保障政策が構築され，同時に制約も課してきた，日本が国内おいて独自に形成した独特な平和主義的アイデンティティーを論じることが，構成主義の実証研究の一つの基礎となってきた（Katzenstein, 1996; Katzenstein and Okawara, 1993; Berger, 1996, 1998）。他方，現代日本のより広範な政治および経済の規範的構造に焦点をあてる学者は，戦後日本は，「西洋のリベラルな秩序」との融和に成功し，西洋の支配的な規範を採用してきたと論じてきた（Deudney and Ikenberry, 1993/94: 17）。この2つのアプローチは，現代日本のアイデンティティーの分析において異なっている。後者は，日本の西洋のリベラルな民主主義への適応への成功を強調するのに対し，前者は，純粋に国内を源泉とする独特な規範的あるいは文化的な構造を論じている。この様な根本的な違いにもかかわらず，双方の考えは，それが意味する現代日本と軍国的かつ帝国主義

Hosei University Repository

的過去との対比においては一致しており，日本の太平洋戦争での敗北を現代日本のアイデンティティーの形成における重要な転回点と捉えている。

本稿は，自我または他者の視点を通じた日本のアイデンティティーの新しい分析を提供し，ソ連・ロシアという「他者」に対する戦後の日本の「自我」の形成を考察せんとするものである。本稿は，アイデンティティー形成過程の捉え方の見直し（Doty, 1993: 298）と同時に，その焦点を規範や文化から日本の自我形成のおける相違性に移すことにより，現代の日本と戦前のアイデンティティー論との相違性のみならず，その継続性を観察することが可能となると論じている。ここでは，ナショナル・アイデンティティーが，首尾一貫した構造ではなく，多様な「他者」との関係に現れる多様な言説として捉えられている（Neumann, 1998: 1; Rumelili, 2004: 29–34）。更に，本ケーススタディーは，アイデンティティーと外交政策の因果関係の発見を図るものではなく，「批判的構成主義者」のフレームワーク（Rumelili, 2004）に従い，政策を，アイデンティティーを確保し，再生するための表現的行動として捉えている。しかしながら，著者は，相違性が必然的に，行動の「他者化」をもたらす（例えばCampbell, 1992）という先験的な仮定に基づいているのではなく，認識論的かつ行動的なレベルで，実証的に見出せる相違性に対する様々な関係様式の存在も勘案している。(2)

本ケーススタディーでは，二つの意味での貢献を望んでいる。一つは，現代日本のアイデンティティーの形成における変化と継続性を明らかにすることである。もう一つは，「自我・他者」の視点を通じて，日本とソ連／ロシアとの関係を考察することである。ここで提供される分析は，既存の日本に関する構成主義の学説と比べると幾つかの根本的な違いを含んでいる。まず，第一に，単一の一枚岩的でかつ静的なアイデンティティーではなく，本稿はアイデンティティーが多様性に富んでいると論じている。第二に，本稿は，アイデンティティーの源泉は，国内あるいは国外のどちらかの要素にあるのでなく，国内外

Hosei University Repository

の要素の組み合わせに存在すると論じている。第三に，本稿は，文化的アイデンティティーに関しては，1945年以前と戦後の構成要素に継続性が観察できることを論じている。

日本のロシアとの関係は，日本のアイデンティティーの広範な性質を検討するにあたり，特に興味深いケーススタディーを提供している。過去60年間に亘り，両国間関係は継続的な対立で特徴づけられてきたが，1991年のソ連の解体以降は領土問題が未解決であるにも関わらず，多くの変化を経験してきた。1950年代以降，1945年9月のソ連の北方4島の占領をめぐる領土紛争が，両国間のアジェンダを支配してきた。第2次世界大戦の終結より60年間が過ぎた今日，ロシアは，北朝鮮と共に，日本が正式な平和協定を締結していない唯一の国である。過去の50年間に亘り，日本の世論はソ連・ロシアに対して，圧倒的にネガティブであり，両国（ロシアと北朝鮮）は，国内の世論調査において，依然として最も人気の無い国のトップにあげられている。

同時に，ソ連の崩壊は，両国関係に転回をもたらした。1992年以来，日本のロシアとの関係は，幾つかの重要な変化を経験してきた。継続する領土問題にもかかわらず，両国は，政治，経済，安全保障の領域において，限定的ではあるものの拡大する協力関係を築いてきた。冷戦時代に比べて，両国間の関係は大幅に厚くなり，より多様化されたものとなった。本稿は，日本の対ソ連とロシアのアイデンティティーの分析を通じて，この様な継続性と変化を説明しようとするものである。

本論文の前半では，冷戦時代の日本の対ソ連のアイデンティティーは，二つの重要な構成部分に分けることができると論じる。すなわち，共産主義ソ連を他者とした政治的アイデンティティーと，冷戦時代において，ロシアに対する日本の「自我」を形成した社会・文化的アイデンティティーである。この両方のアイデンティティーの形成においては，冷戦構造の自我と他者との間の境界

Hosei University Repository

を決定する政治的慣行が重要な役割を果たした。具体的には，自我と他者，「内側」と「外側」，「正常」と「異常」の間に境界を設けた冷戦時代の国際政治である（Campbell, 1992: 69）。同時にこの言説的な構築を分析するに当たっては，国内的な要因を忘れてはならない。つまり，ソ連の政治的な他者化は，戦後日本の政治的なアイデンティティーの確立を巡る保守勢力と進歩主義勢力との国内抗争とも無関係ではない。他方，1970年代後半に登場した社会・文化的アイデンティティーは，かなりの程度，ロシアに関する戦前の議論の再生であった。それは，近代の国際秩序への日本の編入により始まったプロセスを反映している。このプロセスにおいては，日本の指導層が，日本の特殊性を強調すると同時に，西洋の普遍的「正常性」を有している日本のアイデンティティーの形成に努めた。

アイデンティティーの本質的な形成に関して，本稿は次のような考察を行っている。両方のアイデンティティーは，日本の「自我」とソ連・ロシアという「他者」の間に，ヒエラルキー的形成を作り出したものの，両者は，本質的な構成要素の違いを持っていたため，抱合的・排他的スペクトラムの両極（Rumelili, 2004: 37）に位置していた。すなわち，後天的に獲得した特性（民主主義，自由主義，市場経済）を基礎にしている政治的アイデンティティーの場合においては，ソ連・ロシアが，脅威的で究極的な他者の位置から移動する可能性があった。他方，固有の民族的な特性に基づく社会・文化的アイデンティティーにおいては，日本の「自我」とロシアという「他者」との間には，取り消せないヒエラルキーが生み出された。本稿の後半では，この様な緊張関係が，日本と共産主義後のロシアとの関係においてどのように表面化したかを分析する。

Hosei University Repository

戦後日本のアイデンティティーにおけるソ連／ロシア

日本にとってのソビエト連合

占領期（1945-52年）に始まった日本の自由民主主義への半強制的な編入は，ソ連（と共産主義全般）の「他者性」の基礎を築くにあたって重要な役割を演じた。つまり，戦後直後には，ソ連の政治システムと社会に関する世論は，同質性を欠け，非常に否定的なものから非常に肯定的なものまで，多様で様々な要素を含んでいた（Kyokawa, 1946; Watanabe, 1948; Tantoku, 1949: 18)。しかしながら，占領軍が実施した包括的な教育，経済，政治の改革と，1949年以降の，広範な冷戦戦略の一環としての共産主義シンパの書物や著名人に対する厳しい抑圧は，その後の国内世論一般，特にソ連と共産主義に対する世論の形成に重要な役割を果たした（Japanese Newspaper Publishers and Editors Association, 1951; Takemae, 2002)。占領政策の重要性もさることながら，日本が独立を再び取り戻した後も，支配的な保守勢力と左派反対勢力の国内での政治的な対立の中で，ソ連の政治面での「他者性」はより強化された。

独立を取り戻した後，支配的な保守層は，アメリカの占領下に始まった「民主的」で「自由」な新しい日本を建設するプロジェクトを継承した（例えば，1951年10月12日の国会での吉田首相の演説，TD)。保守勢力は，異なったバックグラウンドやアジェンダを持つ様々なメンバーを抱合していたため，日本の帝国主義的過去を物語る際には，「他者」としてのソ連は，様々な役割を演じ，時には矛盾した目的のために利用された。しかしながら，日本の過去に対する考え方の違いにもかかわらず，保守的な諸言説は，日本を，「他者」であるソ連とは正反対なものと論じることにより，日本の正常性を強調するという共通する目標を持っていた。

Hosei University Repository

一部の保守的な論者にとっては，「権威主義的」ソ連，「言論の自由の不在」，「国家ナショナリズム」による支配は，帝国主義時代の日本とソ連との比較を通じて，戦後の日本と1945年以降の日本との断絶を強調する機会を提供した。この様な主張は，「権威主義的」，「想像もできない」，「ナショナリスティック」なソ連に体現されている，日本の「異常な」過去と対比することにより，「自由」で「民主的」な新生日本の正常性を強調した（Nakasone, 1954: 1-38)。

他の保守勢力の論者にとっては，美化され，うわべを取り繕った大日本帝国の過去の記憶が，戦後日本のアイデンティティーに対する彼らの理解の重要な要素であった。そこでは，共産主義のソ連（および中国）は，日本の全体主義，軍国主義，帝国主義的な最近の歴史に対して辛らつな批判を加えていた左翼勢力の否定的な見解から，日本の帝国主義の歴史を守るための機会を提供した。このようなソ連の「他者化」は，左翼系の歴史学者により主として編纂された歴史教科書を巡る争いに最も鮮明に現れている。例えば，左翼勢力から見て，教科書に対する保守勢力の最初の攻撃であった，保守与党の「教科書問題に関する特別委員会」は，歴史教科書と歴史教育一般を改定する緊急の必要性を次のように弁明した。つまり，「赤い」（すなわち共産主義的）教科書は，ソ連と共産主義中国を崇拝しており，日本の若者に日本とは全く異質の歴史観を提供していると主張した（教科書問題に関する特別委員会，1955年)。

しかしながら，保守支配層が，国民の支持獲得のために野党や左派知識人と争った際に，最大のチャレンジとなったのは，「平和」，「民主主義」，「自由」といった戦後時期の支配的な標語の定義を巡る争いであった。特に激しかったのは保守本流勢力が日本の外交政策の一つの基軸と見なしていた日本と米国との軍事同盟を巡った争いであった。重要な点は，戦後直後の20年間は，軍事同盟に対する反対が，日本の国民により相当な支持を受けていたことである。非共産主義的左派（主に社会党と左派知識人の一部）は，現在の日本の政治では，どちらかと言うとマージナルな存在になってしまったが，特に1950年代

110

Hosei University Repository

と60年代の冷戦時代の国内世論の形成においては，重要な役割を果たした。例えば，日米安全保障条約締結の2年後の1953年に実施された世論調査では，より多くの回答者が，米国の同盟ではなく左派が主張していた非武装中立を選択した（参照　Mendel, [1961] 1971: 43)。

イデオロギー的にも，政治的にも，日本の左派勢力は，恒常的に分裂状態にあり，今日に至るまで，日本の政治思想の学者は，このイデオロギー的な対立の整理に多くの時間を捧げている。しかしながら，今日の研究の観点からは，一般的に，非共産主義的左派が，ソ連を「自我」の延長と見ることは無く，日本の代替的なアイデンティティーの形成に当たっては，ソ連は「他者」の一つであり続けたと言うことは可能であろう。

戦後日本の左派は，民族主義的な色が強く，「平和」と「独立」が最も重要なスローガンであった（Stockwin, 1968; Oguma, 2002)。左派の言説によれば，日本の平和と独立は，日米安保条約の廃棄と永久的な非武装中立主義の採用によって初めて実現可能となるとされた。言うまでもないことであるが，この議論における主要な「他者」とは，「アメリカ帝国主義」であり，日本が依然として占領下にあり，従属していると論じることにより，その多くのレトリックは米国合衆国に向けられていた（Stockwin, 1968: 1-20; Oguma, 2002: 447-98)。よって，ソ連邦を訪問した多くの左派知識人が，ソビエト社会，政治，自由の状況，民主主義と技術面での進歩に関して，どちらかと言うと好意的な報告をしたことは，何ら不思議ではなかった（例えば Japan Science Council, 1956)。

しかしながら，ソ連に対する一定の賞賛にもかかわらず，民族主義的で，独立志向の強かった進歩主義的言説は，ソ連邦との同盟や共産主義イデオロギーの信奉は思い描かなかった。例えば，東京大学の総長を務め，指導的な進歩的知識人の一人であった南原繁は，彼の非常に好意的なソ連邦訪問の記録の中に

Hosei University Repository

おいても，日本は独立独歩を歩むべきと結論づけている。アメリカ，ソビエト，中国の何れも，日本のモデルとなるべきでないと，南原は論じた。更に，日本は，その独立を再び確保すべきであり，真の民主主義，すなわち，全ての人類と自由の尊重を実現するためには，「自分自身の道を歩まなければならない」と主張した（Nanbara, 1955: 68-73)。

1954-55年の左派と右派社会党の合併後，統一社会党は，その綱領を発表した。この綱領は両勢力との間の妥協の産物であったが，社会党の一部の主要メンバーにおける共産主義に対する強い疑念と，進歩派層の投票を巡って争っていたソ連シンパである日本共産党とのライバル関係を反映したものであった。日本社会党は，資本主義と共産主義勢力の双方からの独立を強調して，日本の中立性を主張していた（Stockwin, 1968: 71-97)。従って，社会党は，日本の支配層と米国のみならず，日本の共産党，更には，ソ連の「帝国主義」と「国際共産主義」に対する激しい批判を展開していた。ロシア革命の結果登場した「国際共産主義」は，多くの国において，社会主義者と労働組合を分断し，資本主義と共に社会主義の勝利を妨げている有害な勢力と看做されていた。故に，共産主義は，帝国主義の一つの道具に過ぎず，「個人」を「グループ」に隷属させ，民主主義や自由を何ら尊重しないものと論じられていた。社会党の綱領によれば，社会主義は，自由な社会でのみ存在可能で，極左派の革命モデルを暗黙のうちに否定していた。その一方，社会主義の到来こそ，真の民主主義を実現する途であると主張した（JCP, 1955: 11-26)。

冷戦のもとでの対立関係における日本の地位に関しては，進歩派層は，米国との同盟が，日本を両大国間の紛争に巻き込む可能性を指摘し，最終的に日本に破滅をもたらすので，直ちに中立的なスタンスをとる必要があり，日米安保を破棄すべきと主張した。この見方によれば，日本の安全保障は，米国，日本，ソ連，中国を含む「ロカルノ・スタイル」の集団安全保障協定か，「国連軍」の日本への駐屯により保障され得ると想定されていた（Sakamoto, 1959)。

Hosei University Repository

保守勢力はこの「中立性」のパラダイムの非現実性を強調した。つまり，冷戦構造のもとでは，日本の中立の達成は非現実的であり，日本の安全保障上，米国と同盟は不可欠であると強調した。米国との同盟は，アジア地域の安定を担保するだけでなく，平和や自由という戦後日本の価値を追求するための唯一の方法として論じられた（Kosaka, 1963)。左派は，日本を米国の従属国として看做していたが，保守の言説では，日米安保は自由で民主的という戦後日本のアイデンティティーの根幹をなすものと論じられた。このため，保守の言説においては，「個人の自由と人権の尊重」を伴う国内の平和と民主主義が，「自由主義諸国陣営」への日本の所属という対外政策の一部となっていた。日米安保は，このメンバーシップを保障し，結果として，国内の平和と民主主義の基礎をなすものと看做された。このため，保守の言説においては，左翼の中立的な日本というビジョンは，「反民主主義的な」共産主義勢力に参加するための口実に過ぎず，必然的に日本の民主主義の崩壊とアジアにおける日本の「孤立」をもたらすと論じられた（例えばLDP, 1966: 3-15)。左派勢力が主張した中立主義は，共産主義と同一視され，日本の平和，民主主義と自由に敵対し，それを危うくするものと看做されていた（例えば岸首相の1957年6月21日のナショナルプレスクラブでのスピーチ，TD)。

要すれば，日本の戦後のアイデンティティーの性格と，平和，民主主義，独立の相反する定義を巡る保守勢力と進歩勢力との論争の中で，ソ連の政治的な他者性が出現した。50年代の半ばに顕在化し，本稿の後半で詳細に論じられるソ連との間の領土問題は，両陣営により，日本のアイデンティティーに関する相反する言説において，それぞれの構築の正当性を強化するために使われた。保守勢力は，領土問題を，ソ連の拡張主義的，裏切り的，脅威的な性格の決定的な証拠としてあげていた（例えばKosaka, [1977] 1996: 134-8)。他方，進歩勢力は，北方領土の返還要求を支持することにより，愛国主義者としての自らの正当性を高めたが，同時に，日ソの領土問題の解決は，日米安保の廃棄を含

Hosei University Repository

む日本の外交政策の広範な見直しの中でのみ可能であると主張した（Takano, 1962: 247–50; Hara, 2000: 245–8）。

1960年代の半ばより，日本社会党とソ連邦との関係が徐々に改善し，社会党は，ソ連邦との「野党外交」に従事した（そして恐らく，ソ連邦より多額の資金援助を得た。Nagoshi, 1994）。他方，ソ連の脅威を訴え，日本を支配していた自民党とソ連邦との間には，政治関係が殆ど無かった（Hara, 1998）。1970年代初めにソ連側が仕掛け，田中首相が応じた両国間関係を正常化しようとした短命の試みは，より広範な西側と東側の「雪解け」デタントの一部と看做されたが，ソ連の「他者性」の根本的な見直しを伴うものではなかった（例えば田中首相の1972年10月30日の衆議院での演説，NDL website）。1956年のハンガリーや1968年のチェコスロバキアの民主的な反抗の抑圧や1979年のアフガニスタンへの軍事侵攻に見られるソ連の行動パターンは，一般に，ソ連の政治的な「他者性」の再確認として捉えられ，民主的，平和的かつ冷戦対立における西側陣営の一員という日本の自己認識がより一層厚くなった（例えばDiplomatic Blue Book, MOFA, 1980，またはNakasone, 1983）。

日本の主流言説におけるソビエトの認識の変化は，ゴルバチェフの改革の最後の数年間に現れ始めた。ソビエトの「他者性」に関する日本の見方の変化は，ペレストロイカとグラスノスチによる「人間の顔を持った社会主義」としてソ連のアイデンティティーを再構築しようという試みに応えるべく起こっただけでなく，1991年4月の東京訪問を頂点とする，日本との関係におけるゴルバチョフのイニシアティブを反映したものであった。これらは，ソ連が日本の経済力と政治力を認めたという認識の表れであった（例えばKimura, 1991）。別の言い方をすれば，ソ連が日本の資本主義的民主主義のアイデンティティー及びその優位性を確認したということに対して，日本のソ連認識に変化が生まれ始めた。「自我と他者」の関係の再構築において，ソ連が，究極的な「他者性」の領域から，民主主義，個人の自由，法による支配という普遍的な価値の実現

Hosei University Repository

の緒についた国として，一時的な違いの領域へ徐々にシフトすることをもたらした。この過程で，日本の「自我」は，これらの価値の成熟した代表としての立場が再確認され，ソ連との関係では，ガイダンスと支援の提供者となった（例えば1991年4月17日の海部首相の演説，TD，および1991年3月14日の衆議院予算委員会での演説，NDL database）。

ソ連は，ゴルバチェフの東京訪問後のわずか6ヵ月後に崩壊し，新たに独立したロシアとの関係での日本の政治的な「自我」の再構築の過程がその後続いた。アイデンティティー構築の変化とその行動的な出現については，本稿の後半部で詳細に検討することする。

日本の「ロシア」

ロシアに関する社会文化的言説の検討を進める前に，近代日本における「他者性」の言説のより一般的な構造を簡単に紹介したい。19世後半に日本が半ば強制的に西洋支配下の国際社会に編入されたことは，日本が受け入れた西洋のより一般的な世界観の不可欠な要素として，「他者化」に関する西洋の文化様式を内在化することをもたらした（例えばTanaka, 1993; Morris-Suzuki, 1998）。しかしながら，日本の言説は西洋の他者・自我の構造を単に再現した訳ではない。確かに，西洋と同様に，日本が新たに獲得した植民地，中国，そしてより広範であいまいアジアは，発達が遅れ，日本に劣っているものとして認識されるようになった。しかしながら，西洋は，日本を東洋の一部とし，異質なものとして認識し続けた。このため，日本の言説においては，アジアである「他者」が日本の過去と結びつけられることによって，東洋でありながら近代的である日本の東西関係における特殊な地位が作り出された（Tanaka, 1993: 18）。

日本にとっては「東洋」の一部ではなく，欧州にとっては，以前より東方の重要な「他者」であったロシア（Neumann, 1998）は，近代化と文明化の領

Hosei University Repository

域における日本の「自我」の構築の試みにおいて，上記のアジアと同様な役割を果たすようになった。例えば，日露戦争の期間中（1904-05）には，国内の世論は，文明化，平和，博愛の名のもとで，野蛮なロシアとの戦いという歴史的なミッションに着手した国として，日本を文明諸国の代表と描写していた（Shimazu, 2005: 365-9）。

しかしながら，日本の勝利後の数年のうちに，この言説には，微妙な，しかし重要な変化が生じた。文明国としての日本の自己アイデンティティーを揺るがし続けたアングロ・サクソン世界における黄禍論の再現を反映して，ロシアに対する勝利は，野蛮主義に対する文明の勝利としてのみ捉えられるのではなく，白人に対するアジアの国家の勝利としても描写されるようになった。この議論は，アジアの指導者としての日本に特別な地位を与え，日本の帝国主義とアジアの植民地化に対して文化的な支柱を創造することに成功した（例えばIkura, 2004: 243）。

敗戦後の最初の20年間は，日本の文化が一般的に否定的に論じられ，日本のファシズムと軍国主義の根本的な原因として看做されていた（Aoki, 1999: 86-90）。一般世論および，左派が支配的であった学会での論争においては，ロシアの社会・文化的構築は見られなかった。しかしながら，1970年代後半と1980年代前半に，ロシアの社会及び文化に関する議論が再燃した。それは学問的な書物のみならず，ロシアと日露関係に関する大衆小説，歴史小説，新聞や雑誌の記事や随筆などにも現れた。当初は，保守派の学問的あるいは準学問的な議論に現れたが，この様なロシアの認識は，国民の多くに受け入れられることになり，今日まで維持されていると言えよう（例えばIde in Yokoteでの世論調査，2004: 255-68）。

この様な言説は，戦後を克服し，政治および文化の面での自己認識において，敗戦の遺産を過去の物としようとする，より広範な試みの中で現れた。一般的

Hosei University Repository

に日本人論として知られている多数の著書が最も盛んであったのは1970年代末であった。この言説は，学術的あるいは大衆的な多くの著書から形成され，日本のユニークな地理的な位置，農業の生産形態，社会の歴史的構造，日本の言語の特有性を源泉として，本来的に平和で協調性に富んだ国として日本の独特で優れた文化的アイデンティティーを再構築しようとした（日本人論の批判的な分析については，例えばDale,［1986］1999参照)。

重要な点は，この様な日本の新しい文化的アイデンティティーが日本の保守勢力の政治的言説の不可欠な一部となったことである。大平首相（1978-80年）が1979年1月に宣言して「文化の時代の到来」と「文化の時代研究グループ」の設置は，戦後初めて公式に，経済超大国としてだけではなく，独特な文化を持った国としての日本を宣言した例と看做すことができる。本稿の目的のためには，日本の独自性に関する現在の他の通俗的な文献と同様，研究グループが作成した報告書は，単なる文化的な議論にとどまらなかった事を指摘することは重要である。19世紀後半の日本の政治的思考に組み入れられた啓蒙主義の基本的なアイデアの一つを模倣して，その主張は，文化と政治との間に，弁証法的な関係を構築しようと試みたが，それは，日本の経済的成功が，基本的な文化的優位性を証言していることを意味しようとするものであった(Study Group on the Age of Culture, 1980)[(3)]。

この様な経済的成功に基づいた文化的な優位論という文脈の中で，ロシアに関する社会文化的言説が再登場した。これは，日本を再び「文明化された」国家の一員とし，と同時に，日本の文化的アイデンティティーに独自の場所を提供したいという，日本のエリート層のより広範な努力の不可欠な一部として理解すべきであろう。この文化的な構築は，保守のソ連を政治的な「他者化」として看做す言説から派生しており，以下に示す通り，これまでと同様に，民主的・権威主義的，平和的・好戦的といった二分法論に依然として依存していた。重要な点は，ソ連の政治的な他者性が社会・文化的他者性により取って代わら

Hosei University Repository

れたのではなく，正常と異常との間の境界設定のプロセスにおいて，政治的および文化的言説が合体していた冷戦のより広範な文脈の中で，この二つのソ連の認識が相互作用し，ソ連の他者性を強化していたことである（Campbell, 1992)。

しかしながら，このようなロシアの文化的な構築は，冷戦時代の正常と異常との間の境界設定の慣行を固執していたと同時に，日露戦争後に登場したアイデンティティー言説を概ね再現したものとしても見ることができる。すなわち，この様なロシアに関する議論では，日本は，明確的に独特な存在であると同時に，文明的な正常兼普遍的な領域の一部として描写された。ロシアの相違性に関する西洋の「伝統的な議論」(Campbell, 1992: 195; Neumann, 1998: 65-112）の日本国内での復活の結果として，日本の文化を病理的なものとする捉え方（参照 Littlewood, 1996; Hammond, 1997）から救うようになった。同時に，この様な社会・文明的な言説は，日本の相違点を相対化し，日本を西洋の外側におくことによって，日本に独自の優位的な立場を作り出した。

このプロセスでは，西洋の言説において日本及びロシア両国の特質として看做されていた，先天的な好戦主義や野蛮性や残酷さ等は，ロシアにのみ固有で独特な国民性として語られ，日本を野蛮な「他者」の領域から救いだした。例えば，この言説においては，ロシア固有の「深く根付いている力の崇拝」が「脅迫的な」且つ「はったりをよくかける」ロシアの交渉スタイルの原因として語られた（Kimura, 2000: 127; または Shimizu [1979] 1992: 277-83 および Sato, 2005: 82-3)。ロシアの気候と自然環境により，「苦闘」が，ロシア社会の基本的な規範となり，ロシアのメンタリティーにおいては，肉体的な力が，崇高な価値を持つと主張された。その一方で，このメンタリティーは，秩序を維持する唯一の方法として，強い指導者を尊重し，それに服従する規範を形成した（Kimura, 1980: 35-7)。ロシアの長い伝統である外国人に対する嫌悪はロシアのユニークな地政学的な地位の産物として語られ，ソビエトの同盟関係

Hosei University Repository

への不信と，自助依存への根源として提示された。マルクス・レーニンのドクトリンと合わさり，ロシアの地政学的位置が，ロシアの伝統的な「外国への疑念，敵意，不信」をもたらしたとされた（Kimura, 2000: 41; Shiba, [1986] 2002: 10-11, および 199)。

1970年代と1980年代のより広範な日本人論での言説と同様に（Aoki, 1999: 86-122)，ロシアに関する社会・文化的な言説は，概ね，戦後の年代における日本文化に対する否定的な見方に対する回答であった。このため，日本の文化を否定的な「他者性」から救い出すという，そのミッションにおいて，西洋のロシアに関する言説だけではなく，日本の文化に関する戦後の日本国内および西洋の言説が，日本に対して抱いていた特に否定的な特質を，ロシアに対しても当てはめた。

例えば，依然として日本研究という分野において影響力を維持している，アメリカの人類学者のルース・ベネディクトの「菊と刀」(1946年）は，日本の文化的独自性に関する現代の否定的な言説の最も代表的な例であると言えよう。要すれば，ベネディクトは，日本人は，菊に代表される肯定的な性格と，刀により代表される否定的な性格を体現していると論じた。彼女の説によれば，菊は美学，礼儀正しさ，適応性，もてなしを代表し，刀は，軍国主義，硬直性，保守主義等の日本人の精神の否定的な側面を代表している。日本のロシア文化論も，同様に，ロシアの国民性を二つに分け，「平原的な性格」と「森林的な性格」という二重人格に苦しんでいるロシアを描写した。前者は，過激主義，快楽主義，そしてどの様な権力からも自由を要求する否定的な性格を体現しているのに対して，「森林的な性格」は，沈黙，禁欲，神秘主義を代表していると論じられた（例えばShimizu, [1979] 1992: 240; Morimoto, 1989: 22)。この様な精神的なアンバランスが，消極的な服従から過激な暴力への極端な行動の変化をもたらし，「自我」と「外部」に対する一貫した不安感の主な原因であると看做された（Kimura, 1980: 56-7)。日本の文化に対する否定的な見方

Hosei University Repository

のもう一つの重要な要素は，権力に対する盲目的な尊敬である。日本社会のヒエラルキー的な構造と日本を頂点に置いた世界のヒエラルキー的な構築と共に，この点を，ベネディクト（1946）のみならず，戦後日本の最も有名なリベラルな知識人である丸山真男によっても，日本の文化の主要な特徴としてあげられている。丸山は，日本のナショナリズムの勃興の歴史的な背景を，次のように叙述している。(4)

> Consequently, when the premises of the national hierarchy were transferred horizontally into the international sphere, international problems were reduced to a single alternative: *conquer or be conquered*. In the absence of any higher normative standards with which to gauge international relations, *power politics is bound to be the rule and yesterday's timid defensiveness will become today's unrestrained expansionism*. Naturally, *a psychological complex of fear and arrogance* holds sway here as a primitive attitude towards the unknown (1963: 140; emphasis added)。

日本のロシア社会文化論では，上記の特徴が，ロシアの民族性の一部として描かれている。例えば，ロシアの広大な領土と自然と気候との戦いが，ロシア固有の巨大なものに対する固執と偉大さや力への渇望，そして力と権力に対する究極的な尊敬の原因であるとして説明されている（Kimura, 1980: 68-76)。丸山が，国内のヒエラルキーを海外に投射した結果として説明した日本の領土拡張主義は，ロシアに関しても，その国民性の不可欠な要素として論じられた。ロシアの「伝統的な拡張主義」は，ロシア人が森林から草原に出てきた後，安全を確保する唯一の方法であったバッファー・ゾーンの構築という考えへの固執に遡ることができると説明された。この観点から，この様な社会文化論の正当性を高めるために，領土紛争が，ロシアのこれらの性格の最も優れた代表例であると頻繁に引き合いにだされ，その実証例の役目を果たした（例えば

Hosei University Repository

Kimura, 1987: 136; また Shiba, [1986] 2002)。

しかしながら，ロシアを社会文化的に構築することは，日本を普遍的な正常性の領域に位置付けることに留まらなかった。西洋の言説における日本とロシアの他者性は，肯定的で特殊な日本の構築を可能にした。つまり，ロシアと同様に，日本は西洋の外側に置かれていたが，ロシアと異なって，文化的には，西洋に対し優位であると構築された。ここでは，西洋と国内の両言説における日本の否定的な特殊性は軽視されるか，または，ロシアとの比較では，相対化された。場合によっては，西洋の言説における両国の類似性は相違性を強調するために利用された。つまり，両国は正常性を計る上での基準とみなされていた西洋という領域の外部に置かれ，西洋に劣等しているロシアは，西洋より西洋的な日本の優越性を強調するために使われた。

例えば，両民族は，精神主義，個人主義より共同体の重視，コミュニティーにおける均一性と調和を究極的な価値と看做す点等において文化的な類似性を分かち合っているとしばしば論じられた（例えば Sankei, 14 October 1993; Okazaki and Morimoto, 1993)。日本とロシアは共に，欧州とアジアとの中間に位置し，その発展の過程において共通な特徴を持っていると看做された (Kawato, 1995: 227-9)。人権と民主主義の観点では，ロシアと日本は，共に，西洋社会とは異なり，コミュナリズムを代表するものと看做され，市民社会，民主主義，資本主義の西洋のモデルを，正確に受け入れることはできないと論じられた（Hakamada, 1996: 55)。

しかしながら，既に述べたように，この類似性は，両国の文化的本質の違いを強調するためにも使われた。日本を西洋と比較して，ベネディクト（1946）は，日本人は「恥の文化」に属するのに対して，西洋社会は「罪の文化」を共有すると論じた。ここでは，この様な対比点が再検討され，西洋と日本の両方の文化は，第三の文化圏，すなわちロシアの文化と対比されることにより，同

Hosei University Repository

等のステイタスが与えられた。ロシアは，どちらの文化の類型にも属さず，西洋と日本の両方の文化に対して劣後するものとされた「恐怖の文化」という新しいカテゴリーに属すると論じられた（Hakamada, 1996: 121-5)。どこにおいても，「平和，協調性，安定性」が蔓延しており，驚くほど均質的で協調性に富んだ日本の社会と，ロシアの好戦性，不安定性，抗争が対比された（Kimura, 2000: 26)。アジア太平洋の平和と繁栄への貢献者としての自らのパワーの役割を認識している点において，ユニークな存在である平和的な「商人」国家である日本と，国家権力の基盤が武力と純粋に政治的な論理であり，専制的かつ縁故主義的なロシアが対比的に論じられた（Kawato, 1995: 221-30; Shiba, [1986] 2002: 74-199)。

結論を述べると，ソ連・ロシアとの対比による日本のアイデンティティーの形成は，それぞれが異なった社会・時間的な源泉を有する二つの次元に沿ってなされた。既に述べたように，双方が，抱合性・排外性のスペクトラムの対極に位置することにより，これらのアイデンティティーは，常に本来的な緊張関係を持っていたが，これは，「自我」と，「他者」としてのソビエトとの間に境界線を引く冷戦時代の慣行のもとで隠蔽されていた。以下のセクションでは，日本とソ連崩壊後のロシアとの関係において，この緊張がどの様に現れたかを考察することとしたい。

日本とポスト・ソビエトのロシアとの関係

日本のアイデンティティーにおける‘新生ロシア’

共産主義の放棄と，市場経済と西洋型の民主主義の導入は，ロシアを日本の政治的な「自我」の領域に組み入れる結果をもたらさなかったが，相違性は再検討された[5]。既に述べたように，ロシアの相違性の再検討のプロセスは，ソビエト連邦の末期に始まったが，冷戦時代の政治的かつ文化的な推論的共生関係

Hosei University Repository

に反するものであったため，そのプロセスは，どちらかと言えば，緩慢なものであった。このため，ロシアが新しい政治的なアイデンティティーを獲得することに対しては，数多くの疑念を含んでいた。1990年代の初期に，日本の防衛関係者は，ロシアの変化を強い疑念を持って見続け，アメリカと欧州はあまりに楽観的すぎるとたびたび批判した（例えば，Vice-Minister of Defense Miyahara at the House of Representatives, National Security Committee, 14 April 1992, at NDL)。西側のカウンターパートとは異なり，しばしば，ロシアの政治を文化的な視点で視ていた日本の保守的支配層はまた，ロシアに大規模な経済支援を供与することには積極的ではなかった（例えば Kanemaru Shin, Yomiuri 27 June 1992)。

冷戦における国民的性格と政治とのシナジーを永続化させた言説は，保守派の一部の論者の間に存在し続けた。と同時に，ソビエト連邦の崩壊は，日本の政治的価値観の優位性を再確認し[(6)]，それにより，日本の政治的なアイデンティティーを再確認するものとして受け止められた。ロシアの意図の真剣さは，極東における兵力削減や日本との協議の受諾といった新しいアイデンティティーの表明によって裏付けられていた。このため，政治的支配層の間では，ロシアを，国際社会の「真のメンバー」になる過程にあり，「拡張主義者」で共産主義であったソビエト連邦とは，根本的に異なる新しい国と位置づけるようになった（例えば1993年7月10日の宮沢首相の衆議院選挙での演説)。従って，ロシアは，民主主義と市場経済への発展過程にある国として論じられるようになった。これにより，時間的な領域に位置づけられていた相違性は保持され，ロシア及び，他の不安定で「未成熟」な地域に，安定と繁栄をもたらすために活動している成熟した資本主義的民主主義としての日本のアイデンティティーを保障し続けることとなった（例えば1996年9月24日のCSISにおける橋本首相のポリシースピーチ，TD)。

この様に，共産主義後のロシアとの日本の関係においては，政治的な相違性

Hosei University Repository

が保持され続けたとは言え，日本のアイデンティティーにおけるロシアの位置づけは，完全に異質的，かつ脅威的な「他者」であったソ連の位置づけと異なってきた。この変化は，徐々に友好関係と協力の深化をもたらした。この変化は，1997年の経済同友会における橋本首相の有名な演説にもっとも顕著に現れている。橋本首相は，ロシアが歩み始めた市場経済と民主主義への移行の歴史的なミッションに対する彼の賞賛を強調し，今後の日本のロシアとの関係は，信頼，（勝者・敗者が無い）互恵主義，将来のための健全な基盤を構築するための長期的な展望の三原則に基づくべきであると論じた（1997年7月24日の経済同友会での橋本首相の演説，TD)。政治的なアイデンティティーにおけるこのような段階的な変化は，日本のロシアに対する協力と友好化に関する包括的な政策における具体的な変化に表明されている。日本は，1997年には，ロシアのG7への加入を支持した。資本主義的民主主義としての「自我」のアイデンティティーを再確認しながらも，1997年のバンクーバーにおけるAPECサミットにおいて，ロシアのAPECメンバーシップを積極的に支持することにより，日本は，民主主義と市場経済の領域にロシアが完全に統合される政策を推進し続けた（Hashimoto, 2000: 32)。[(7)]

ロシアの相違性が再検討されると同時に，ロシアの軍事的脅威に関する認識も緩和された。無論，ロシアと日本が緊密な同盟国となることは無く，日米同盟のような緊密な軍事同盟と比較することはできない。しかしながら，ロシアの「他者性」から，脅威となる要素が消えることにより，両国の軍関係者の間で，安全保障に関する協議を開始することが可能となった（詳細についてはNIDS, 2000: 254-5参照)。1990年代の初めには，安全保障問題の権威層は，ロシアの新しいアイデンティティーの本質に疑問を持ち続け，ロシアをソビエト連邦とその政策の後継者と看做して，ロシアからの脅威が極端に減少することはあり得ないと論じていた（例えばMiyahara Asahiko at the House of Representatives, National Security Committee, 14 April 1992, at NDL)。しかしながら，極東地域からのロシアの軍事力の段階的な削減（Inui, 2001）

Hosei University Repository

は，日本においては，ロシアによる新しいアイデンティティー遵守の再確認として捉えられ，日本の防衛庁長官の1999年のモスクワ訪問におけるロシアの国防大臣と間の覚書の調印による両国軍隊間の「防衛協議」の制度化に最終的にはつながることになった。両国間のこのような軍事的な和解を，日本の防衛専門家は，「北からの脅威」の解消と論じた（Kawakami, 1998: 43)。

日本が，徐々に認識し始めたロシアの新しいアイデンティティーは，2004年に導入された新しい防衛ドクトリンに反映されるようになった。全体として，それは，日本に対する直接的な侵略の可能性の低下を強調し，例えば，テロ，大量破壊兵器の拡散，この地域への弾道ミサイルといった日本の安全保障に対する新しい深刻な脅威の登場を強調した。地域的な観点では，防衛におけるプライオリティーは，（ソ連・ロシアからの）「北の防衛」から，日本と中国の利害が衝突する（天然資源が豊富な）南西日本の遠隔諸島の防衛に移った（Asahi 11 December 2004: 4)。

要約すると，このセクションでは，ロシアにおける民主主義と資本主義の受け入れと，この新しいアイデンティティーを証明する，それに続く行動面での表明は，ロシアの政治的な相違性の再検討をもたらしたと論じた。この様な政治的なアイデンティティーの包含的な性格は，ロシアの相違性を，完全に異質的で脅威をもたらすソビエトの「他者性」から，成熟した資本主義的民主主義としての日本のアイデンティティーを再確認させる時空的な相違性に変えることになった。

領土紛争

北方領土問題に関する日本の支配的な認識は，ソビエト連邦が日本に対して行った「不法行為」の直接的な経験の結果として，しばしば解釈されている（e. g. Morley, 1962 and Glaubitz, 1995)。この場合の「不法行為」とは，1945年の8-9月の期間の太平洋におけるソビエトの軍事行動を指すのが通例

Hosei University Repository

である。太平洋戦争の終結期と日本の無条件降伏後の数週間に，ソビエト政府は，突然一方的に二国間の中立条約を破棄し，日本が支配していた満州に進攻し，60万人の捕虜を拘束し，強制労働させた。最も重要なことに，クリル列島（日本語では千島列島）の4島を占領して（後に一方的に併合して），日本の住民を追放した。

しかしながら，領土問題と，日本の政治家と国民の双方に共有されている同問題に関する現在の理解は，この様な実際の出来事が発生してから10年後の1955-56年に，平和条約を交渉しようと両国が最初に試みた時期になって初めて現れた。紛争と特に4島の全面返還の要求は，冷戦と「他者」としてのソビエトに対する日本のアイデンティティーの国内における形成の文脈の中で現れた。これまでの研究によれば（例えばMatsumoto, 1956; Hellmann, 1969; Hara, 1998; Wada, 1999; Hasegawa, 2000; Iwashita, 2005），紛争の発端は以下の様に要約することができる。当初の，そしてソビエトにとって，究極的には受諾可能であった2島の返還要求に対して，1955-56年の交渉において，日本が4島の全面返還を要求したことは，交渉と同時期の日本の自由民主党の重要な内部抗争の結果として発生した。同時に，社会主義勢力は，支配保守勢力の内部抗争に触発されて，国民の支持獲得を巡る保守勢力との争いの中で，最終的に4島の全面返還という立場を支持するようになった。更に，日本側のいかなる譲歩とそれに続くソ連との関係正常化の可能性を防ぐために，米国のダレス国務長官は，もし日本がソ連との間に2島で譲歩した場合には，日本の他の領土（沖縄と小笠原諸島）の米国による占領が恒久化すると脅した。振り返ってみると，この様な領土問題の形成は，また，1972年まで沖縄の占領を継続し，今日まで，日本国内に軍事基地を維持している米国に対しても日本のナショナリズムを反目させることになった。この様に，領土問題は，頻繁に論じられるように，対立する歴史記憶の衝突ではなく，国内そして国際的な要素の連関から生じた「純粋に政治的な紛争」であった（Togawa, 1993: 19）。

Hosei University Repository

もちらん，日本の政治は1955年に国民の感情を反映するようになったと論ずることもできる。しかしながら，戦後直後の10年間においては，一般世論と専門家のこの紛争に関する関心と問題認識は非常にあいまいなものであった。4島の問題は，また，この問題を当時の日本において重要な問題と認識していなかったメディアからも概して無視された（例えばthe questionnaire in Soren Kenkyu, 1954: 2–16; およびSekai, 1956)。1955年に恒久的な平和条約を締結しようとした最初の両国間の試みの直前においてさえも，世論調査の応答者の半数以上は，平和条約の交渉に際して，日本はソビエト連邦に対して特定の要求をしなくても良いと回答している（Mendel, [1961] 1971: 203に言及された朝日世論調査)。メディアが交渉に関して広範な報道を行った数ヵ月後に状況が一変し「日本の固有の領土」としての4島一括返還という要求が支持されるようになった（Sekai, 1956)。1956年以降，領土問題が二国間関係の主要な障害となり，今日に至っても，両国間の恒久的な平和条約の締結を妨げている。

日本政府は，北方4島は日本の固有の領土と論じているが，歴史的な事実は，このような主張の妥当性を疑わせるであろう。つまり，政府が主張しているように，1945年のソ連による占領以前には，4島がロシアやソ連の領土になったことはない。他方，北方四島は，歴史的に日本の領土であるとも言えないであろう。4島は，1860年代以降に，明治政府に併合され，更に植民地化されたアイヌの領土の一部であった。このため，この「固有の領土」に対するソ連・ロシアの支配の期間が，日本の支配の期間よりも長くなる状態が，そう遠くない将来に発生する可能性がある。

一八三　日本のアイヌの植民地化は，その性質，悲惨な結果，そして先住民の意思の完全な無視といった点において，他の植民地プロジェクトと大きく異なることはなく，平和的な領土の併合として見做すことは妥当ではないであろう（詳細についてはSiddle, 1996参照)。1910年代まで，これら4島のわずかな住民は，

Hosei University Repository

主として本州から移住してきた漁民で構成されていた。1930年代や1940年代の初めにあっても，4島は日本帝国のエキゾチックな僻地にすぎなかったために（例えばAkimori, 1936），しばしば，満州や韓国といった帝国のほかの「フロンティア」的な地域と比較された（例えばTakakura, 1942: 171）。日本政府の領土返還要求の法的な根拠に対しても疑問の余地がある。つまり日本とロシア・ソ連間の二国間協定だけでなく，ヤルタ協定，カイロ宣言，サンフランシスコ平和条約というような国際法的な文書も関係しており，様々な解釈を可能にしている。たとえば，1955年代の初めに，日本の数人の著名な国際法学者は，4島に対する日本の要求の法的根拠はどちらかと言えば薄弱であることを認めている（Sekai, 1956; およびTakano, 1962）。

しかしながら，その政治的な発端にもかかわらず，領土紛争は，徐々に日本の固有の領土の回復という国民全員の願望と位置づけられ，平和的な日本と好戦的で拡張主義的なロシアとの間の社会文化的な相違性の領域の中に位置づけられるようになった（例えばKimura, 2002: 55-67）。冷戦後，ロシアの相違性が，日本の「自我」に対する脅威的な他者から，より距離が短い一時的な相違性の領域に移ったことにより，「共通の言語」とロシアと日本の間の「共有された利益」と「共通の方向性」に基づいて，紛争の対象となっている諸島に対する政治的な対話が可能となった（Tamba, 2000: 38-9）。それは，法と正義と言った観念や，紛争の解決のための基本的な枠組みとして歴史的・法的事実を導入することを含んでいた（Tokyo Declaration, 13 October 1993, at mofa.go.jp）。しかしながら，日本の普遍的な領域への帰属性を保障するため，同時に，4島の追求は，普遍的な価値の追求として引き続き論じられた（例えばSato, 2005: 80-3）。このため，日本が4島全体に対する要求で実際に譲歩することは，それ自体が，ロシアの主張に一定の正当性を与えることになり，普遍性の構成要素としての日本の「自我」の形成を可能とした社会・文化的なヒエラルキーを損なうことになった。このため，何年にもわたる交渉において，日本側が提案した数多くのシナリオでは，有意義的な妥協が見られなかった。

Hosei University Repository

1992年と2003年の間，両国の指導者は，領土問題の解決の促進を目的として数多くの交渉を行った。ソビエト連合崩壊の直前と直後の期間には，そのアイデンティティーが主として「他者」としてのソビエトとの対比で形成されていたロシアにとり，領土問題で譲歩することより，ソ連とは完全に異なるものとしての「新しい」ロシアのアイデンティティーを確保し得たかもしれない。このため，1992年に，ロシア側は，「領土問題は存在しない」というソ連の立場からの根本的な逸脱となる提案を持ってきた。ロシアのコズレフ外相の1992年の東京訪問時に，日本側に秘密裏に伝えられた提案は，平和条約の締結と，歯舞と色丹2島の日本への引き渡しを含んでいた。[8] それは，また，国後と択捉の残る2島の位置付けについて継続交渉する案を含んでいた。この時期，これまでの立場から完全に逆転して，米国政府も，ロシアを取り込むためのより広範な政策の一部として，領土紛争の解決策を見出すよう日本に圧力をかけた。しかしながら，上記に記したように，日本にとり，全島の返還に関して譲歩することは，一環として検討不可能であった。このため，日本はこの提案を拒否し，4島全体に対する日本の主権をまず認めるようロシアに要求した(Asahi, 2002, 2002a; また Togo, 2007: 167-8)。

5年後の1997年のクラスノヤスク・サミットにおいて，橋本首相は，両国間の交渉は，相互信頼に基づき，恐怖，偏見，前提条件無しに行われるべきであると表明することにより，日本とロシアの政治的な接近を再確認した(Togo, 2007: 240)。領土問題の文脈においては，これは譲歩に向けての日本からの最初の一歩を意味しており（Togo, 2007: 245)，実際に1998年の川奈サミットにおける日本の提案において具体化された。譲歩は，紛争をロシアと日本間の国境画定問題と再定義することを意味し，「一定の期間」にわたり，日本が4島に対するロシアの事実上の支配を認めることを意味していたが，これは，再び，ロシアが4島全体に対する日本の主権を認めることを条件としていた（Panov, 2007: 120; Togo, 2007: 244-6)。2001年の交渉では，日本の立場

Hosei University Repository

は，「4島全部の即時的な返還」要求から，4島の段階的な返還を示唆する「2プラス2」といったより穏便な表現に変化していった。「2島先行返還」が国益[(9)]を損なうものと報道された外務省を巻き込んだ2002年の一連のスキャンダルの後，日本の立場は冷戦時代の「4島返還」という単純な要求に戻ってしまった（Iwashita, 2005: 10-14）。

要約すれば，両国間の交渉の最初の10年間において，日本の外交当局にとっては，相互信頼に基づく譲歩は，紛争をより穏便な文言に再定義することと，4諸島の段階的な返還の可能性を意味していた。しかしながら，ロシアの歴史的な主張に対して一定の正当性を与えるかもしれない全ての諸島の返還要求を再検討することの可能性は，国内の言説において現れることはなかった（冷戦後の交渉の歴史については，Togo, 2007; Panov, 2007参照）。

紛争の対象となっている領土の公平な分割により，領土問題における妥協の必要性を国内の議論に導入しようとした日ロ関係に関する権威ある学者の一人による最近の試みは（Iwashita, 2005），国益を損なうとして保守的なメディアや論者により激しく批判された。この提案に公式に言及した麻生前外相も，同様な批判にさらされ，すぐに政府の立場には変化がないことを表明した（Sankei Shimbun, 15 December 2006, at sankei.co.jp）。彼の後任である町村外相は，領土の平等な分割は検討し得ないと表明して，妥協の提案を全面的に否定し，政府の立場も「4島の即時返還」要求を頑なに支持した（Sankei Shimbun, 30 August 2007, at sankei.co.jp）。この様に，領土での妥協というアイデアは，すぐに国内の言説からは消え去った。

領土紛争を巡る議論を通じた日本のアイデンティティーの再確認のプロセスは，1991年の東京訪問時にゴルバチェフ・ソビエト大統領が着手した「ビザ無し訪問プログラム」にも関連付けることができる。紛争の対象となっている4島のロシアの住民と日本の旧島民，政治家，学者が訪問ビザの取得の必要性

Hosei University Repository

無しに相互訪問を可能とする同プログラムの公式の目的は，ロシアの住民と日本国民の間での対話，相互信頼と理解の強化を図るものであった。この様な交換を通じ，このプログラムは，領土紛争の解決を図ることを目的としていた(http://www.vizanashi.net/index01.htm)。しかしながら，日本側にとって，この訪問は，日本の「自我」とロシアの「他者」との間での文化的ヒエラルキーを再確認し，再構築する行為として機能してきた。訪問の一つの目的として，頻繁にあげられた「相互理解」の促進は，両国間の社会・文化的なヒエラルキーを再確認して，ロシア住民側の「誤解」を修正するものとして一般的には捉えられていた（例えば，ある訪問団の指導者とのインタビュー参照　www.vizanashi.net/sub3/kisyakaken)。この様な再確認のプロセスと言説の反復は，このプログラムに参加したある国会メンバーのスピーチにはっきりと表われている。その訪問を回顧して，彼女は，訪問を通じて，日本の文化的，物質的，科学的優越性から，ロシア側が日本の立場を理解することが，日本側がロシアのポジションを理解するよりも，より重要で意義があることを理解したと述べた（MP Sasano at House of Councilors, Committee on Okinawa and NTs, 6 April 1998, NDL)。このようなヒエラルキー的な議論を通じて日本の社会・文化的アイデンティティーを再構築するプロセスは，領土紛争に関する「教化活動」の一部として，国民向けに政府が作製した各種のパンフレットや教科書の中に見ることできる（MP Yamaguchi Tsuruo Head of General Affairs Agency at House of Councilors, Committee on Okinawa and NTs, 10 March 1995)。

要約すると，このセクションでは以下を論じた。ロシアの政治的な相違性を，全く異なり脅威をもたらす「他者性」の領域から時間的な相違性の領域に位置付け直すことは，両国の指導者間での共通の言語による政治的ダイアローグの開始を可能とした。しかしながら，全4島の返還に関する日本のポジションが変化することはなく，「自我」と「他者」であるロシアというヒエラルキー的な構築を通じて生み出されたそのアイデンティティーをゆるぎないものとした。

Hosei University Repository

国内の言説においては，日本の要求に応じようとしないロシアのかたくな拒絶は，この様なヒエラルキーを再構築し，普遍性の不可欠な構成要素としての日本の文化的アイデンティティーをゆるぎのないものとした。すなわち，領土紛争の文脈においては，日本の要求を，ロシア側が完全に認めない限り，この様なアイデンティティーの構築の安定化はありえない。

結　論

このケーススタディーの限界は自ずと明らかである。中国，韓国，アメリカ合衆国といった他の国と日本の関係，あるいは西洋，アジアといった，より広範でより不明瞭な存在と日本の関係の系譜は，本稿でアウトラインを提示したアイデンティティーの形成とは必ずしも一致しないアイデンティティーを明らかにするかもしれない。しかしながら，日本のアイデンティティーと国際関係におけるアイデンティティー形成のより広範なプロセスに対するそのインプリケーションに関して，この研究からいくつかの結論を得ることができる。

本稿の研究成果は，日本のアイデンティティーが，戦後の平和主義やリベラリズムの信奉だけでは片付けられないことを示している。本稿では，太平洋戦争の敗戦は，日本の自己認識に完全な断絶を生むことは無かったと論じた。敗戦とその後の占領と冷戦は，ソビエト連邦との関係において日本の政治的アイデンティティーの国内での言説を形作ることにおいて重要な役割を演じた。しかしながら，ロシアとの対比による日本の社会・文化的アイデンティティー形成の源泉は，戦後以前に遡ることができると論じた。境界設定という戦後の慣行により提供された対比的な差別化の集合から，現在のアイデンティティー形成は多くを得ているが，西洋のヒエラルキー的構造により支配されている国際秩序に対する日本の半ば強制された編入に，このアイデンティティー形成の源泉を遡ることができる。

Hosei University Repository

19世紀後半の国際社会への日本の編入と日本を東洋に位置付ける広い意味でのオリエンタリズムへの並行的な露出は，西洋的な様式による「他者化」の同時並行的な内省化と，これらのヒエラルキー的な境界設定の社会・政治的な慣行により作られた「正常性」の領域内に日本を位置付けようとする努力をもたらした。日露戦争中および同戦争後には，西洋の言説におけるロシアの「他者性」は，日本が，そのアイデンティティーを，文明化され近代的であると同時に，独自的にアジア的な物として再確認することを可能にした。この様なアイデンティティーは，現在の社会・文化論においても再び出現しており，西洋価値観の普遍的な領域に属しながらも，同時に西洋の外部に属するユニークな国として，日本を再生させた。

国際関係論におけるアイデンティティーのより広範な研究に関して，本稿は，国家的な「自我」の構築は，時には対立する，幾つかの言説を内包し得ることを示した。欧州連合の例を使い，Bahar Rumelili（2004）は，「自我」の関係は，複数の「他者」との様々な異なった相互作用を含むことを，説得力を持って論じた。本稿は，同一の「他者」との関係も，複雑なアイデンティティー形成をもたらす複数の差別化の様式を同様に内包し得ることを示した。政治的アイデンティティーのこの様な内包的でダイナミックな性格は，ロシアがソビエト連盟から政治的にも経済的にも分離した際に，相違性の再検討を行うことを可能とした。ヒエラルキー的な相違性は保持されたが，時間的な観点により見直された。その後の日本とロシア間の協力とダイアローグは，成熟した資本主義的民主主義としての日本のアイデンティティーをゆるぎないものとして再構築した。しかしながら，社会・文化的アイデンティティーの固定的な性格は，ロシアの政治面や行動面での広範な変化にも関わらす，特に領土紛争の概念において，相違性のいかなる再検討を許さなかった。

最後に，本ケーススタディーでは，「自我」と様々な「他者」との関係の複雑性が強調された。ロシアとの関係における日本の「自我」の形成は，同時に，

Hosei University Repository

西洋との関係での日本の自我の形成を含むものであったと論じた。他の国家的，超国家的，地域的なアイデンティティーにおいて，同様なプロセスを見出し得るかは，実証的に検証される必要がある。しかしながら，本稿の研究成果は，一つの特定の「自我」と「他者」の連関が，「自我」の異なる形成と共生的な関係を持ちえることを示している。

注　釈

グレン・フック教授（シェフィールド），クリス・ヒューズ教授（LSE），クリス・ヒューズ教授（ワーウィック），ディルク・ネーバース博士（シュトゥットガルト），イヴェール・ノイマン博士（NUPI），早稲田大学の梅森直之教授と彼の大学院セミナーのメンバーに加え，この論文の草稿にコメント等を頂いた二人の匿名のレフェリーにも感謝の意を表したい。

(1)　本稿を発展された改訂稿は，「Bukh, Alexander (2009) *Japan's National Identity and Foreign Policy: Russia as Japan's 'Other'*, London: Routledge」に掲載されている。

(2)　EU と「他者」の関係における相違性の様式の多様性に関する非常に優れた検証は Rumelili (2004) を参照。

(3)　この「文化的」ラインはその後の保守的指導者が従い，そして今日まで，政治的な議論の不可欠な要素となっている（例えば「Group for Promotion of Cultural Diplomacy, 2005」に出版されたレポートを参照）。

(4)　引用文献の著者の意図を正確に反映するために，オリジナル（英文）のまま引用した。

(5)　確かに，共産主義後のロシアに関する言説は一枚岩ではなく，ロシアを多様な方法で理解していた政治的なスペクトラムの左派と右派からの複数の言説を具現化していた。しかしながら，スペースの不足から，このパートでは，支配的エリートの支配的な言説に焦点をあてている。

(6)　「ソビエト連邦の崩壊は，リベラリズムと市場主義に基づく「我々」のやり方が正しかったことを証明した」と論じた宮沢首相の歓迎スピーチ（1992 年 10 月 3 日の第 16 次自民党全国ワークショップ，TD）を参照。

(7)　時間的な相違性はそのまま残された。例えば，日本の戦後復興の歴史体験が，ロシアの開発のモデルとなりえるとしばしば言及され，両国間の時間的な相違性が再確認された（例えば 1998 年 10 月 22 日の小渕首相のスピーチ，TD）。

(8)　1956 年の共同宣言で想定されていた約束は，4 年後に，日米安全保障条約を，ソ連と中国に対する日本の米国との軍事同盟と看做したソ連が，抗議のため撤回した。

(9)　北方諸島の返還により重要な政治的，軍事的，あるいは経済的な便益があり得ると議論する

Hosei University Repository

ことは可能である。しかしながら，日本側の議論では，これらの諸島に関する国益は，「こん畜生ども」の行いにより傷つけられた名誉と国の威信の回復と定義づけられている（例えばTogo, 2007: 384-6)。

参考文献

Akimori, Tsunetaro (1936) *Chishima Ryokō* [Travel to Chishima]. Osaka: Akimori Tsunetaro.

Aoki, Tamotsu (1999) *Nihonbunkaron no henyō* [Transformation of *Nihonbunkaron*]. Tokyo: Chuō kōron shinsha.

Asahi Shimbun (2002) 'Nichiro tomo himitsu teian' [A Secret Proposal by both Japan and Russia]. 21 May 2002. Tokyo: 4.

Asahi Shimbun (2002a) 'Yomarenakatta serifu' [Lines not Read]. 22 May 2002. Tokyo: 4.

Asahi Shimbun (2004) 'Aratana kyōi e kiō jūoshi shin bōeitaikō/chūkibo kettei' [Adaptation of the New Defense Guidelines and Mid-Term Defense Plan Emphasizing Response to New Threats]. 11 December 2004. Tokyo: 4.

Benedict, Ruth Fulton (1946) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Boston, MA: Houghton Mifflin Co.

Berger, Thomas U. (1996) 'Norms, Identity and National Security in Germany and Japan', in P.J. Katzenstein (ed.) *The Culture of National Security*, pp. 317-56. New York: Columbia University Press.

Berger, Thomas U. (1998) *Cultures of Antimilitarism*. Baltimore, MD: The Johns Hopkins Press.

Campbell, David (1992) *Writing Security: United States Foreign policy and the Politics of Identity*. Manchester: Manchester University Press.

Dale, Peter N. (1986) *The Myth of Japanese Uniqueness*. Sydney: Croom Helm and Nissan Institute for Japanese Studies.

Defense Agency (2004) *Defense of Japan*. Tokyo: Defense Agency.

Deudney, Daniel and John G. Ikenberry (1993/94) 'The Logic of the West', *World Policy Journal* 10 (4): 17-27.

Doty, Roxanne Lynn (1993) 'Foreign Policy as Social Construction: A Post-Positivist Analysis of U.S Counterinsurgency Policy in the Philippines', *International Studies Quarterly* 37 (3): 297-320.

Glaubitz, Joseph (1995) *Between Tokyo and Moscow: The History of an Uneasy Relationship 1972 to the 1990s*. London: Hurst & Company.

Group for Promotion of Cultural Diplomacy (2005) 'Bunkakōryū no heiwa kokka'nihon no sōzō [Towards the Creation of Japan as 'a Cultural Diplomacy Peaceful State']; http://www.kantei.go.jp/jp/singi/bunka/kettei/050711houkoku_s.pdf accessed on 3 April 2008.

Hakamada, Shigeki (1996) *Shizumi yuku taihoku* [Demise of an Empire]. Tokyo:

Hosei University Repository

Shinchōsha.

Hammond, Phill (ed.) (1997) *Cultural Difference, Media, Memories: Anglo-American Images of Japan*. London: Cassell.

Hara, Kimie (1998) *Japanese-Soviet/Russian Relations since 1945: Difficult Peace*. New York: Routledge.

Hara, Yoshihisa (2000) *Sengoshi no naka no nihon shakaitō* [Japan's Socialist Party in Postwar History]. Tokyo: Chūōkōron-shinsha.

Hasegawa, Tsuyoshi (2000) 'Japanese Perceptions of the Soviet Union and Russia in the Postwar Period', in G. Rozman (ed.) *Japan and Russia: The Torturous Path to Normalization 1949-1999*, pp. 175-206. New York: St. Martin's Press.

Hashimoto, Ryūtarō (2000) 'Roshia to wa kanzen na paatonaashippu o' [Towards a complete partnership with Russia], *Gaiko Forum* 13 (13): 30-5.

Hellmann, David (1969) *Japanese Foreign Policy and Domestic Politics*. Berkeley, CA: University of California Press.

Ikura, Akira. (2004) *Iero periru no shinwa* [The Myth of the Yellow Peril]. Tokyo: Sairyūsha.

Inui, Ichiu (2001) Roshia no anzenhoshō ni okeru kyokutō roshia [The Russian Far East in Russian Defence Policy], in H. Matsui (ed.) *Poochin seikenka no tai ajia/taiheiyo gaiko* [Russian Policy vis-á-vis Asia Pacific under Putin], pp. 76-95. Tokyo: Kokusai mondai kenkyūjo.

Iwashita, Akihiro (2005) *Hoppōryōdo mondai* [The Northern Territories problem]. Tokyo: Chūōkōron shinsha.

Japanese Newspaper Publishers and Editors Association (1951) *The Japanese Press*. Tokyo: Nihon Shimbun Kyūōkai.

Japan Science Council (1956) *Soren/Chūgoku gakujutsu shisatsu hōkoku* [A Report of the Scientific Visit to the USSR and China]. Tokyo: Japan Science Council.

JCP (Japan's Socialist Party) (1955) *Toitsu shakaitō no kōryō to sono kaisetsu* [The General Platform of the United Socialist Party with Commentary]. Tokyo: Shakai shichōsha.

Katzenstein, Peter J. (1996) *Cultural Norms and National Security-Police and Military in Postwar Japan*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Katzenstein, Peter J. and N. Okawara (1993) *Japan's National Security*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Kawakami, Takashi (1998) 'Reisen go no senryaku kankyō henka to kurinton seisaku' [Post-Cold War Changes in Strategic Environment and Clinton's Policy], *NIDS Security Studies* 1 (2): 35-58.

Kawato, Tetsuo (1995) *Roshia ni kakeru hashi* [A Bridge to Russia]. Tokyo: The Simul Press Inc.

Kimura, Hiroshi (1980) *Soren to roshiajin* [The Soviet Union and the Russians]. Tokyo:

Hosei University Repository

Soyosha.

Kimura, Hiroshi (1987) *Saishin soren sōran* (Newest guide to the Soviet Union), Tokyo: Entapuraizu.

Kimura, Hiroshi (1991) 'Gorbachev's Japan Policy', *Asian Survey* 31 (9): 798-815.

Kimura, Hiroshi (2000) *Distant Neighbors: Japanese-Russian Relations under Brezhnev and Andropov*. Armonk, NY: M.E. Sharpe.

Kimura, Hiroshi (2002) *Tōi rinkoku: roshia to nihon* [Distant Neighbors: Russia and Japan]. Kyoto: Sekai shisōsha.

Kosaka, Masataka (1963) 'Genjitsu shugisha no heiwaron' [Realist's Theory of Peace]. *Chūō Kōron* 78 (1): 38-49.

Kosaka, Masataka (1996) *Kosaka Masataka gaikō hyōronshū* [Collection of Kosaka Masataka's Foreign Policy Critique]. Tokyo: Chūō Kōron sha.

Kyokawa, Yūkichi (1946) 'Akarui soren no kokumin seikatsu' [The People's Life in the Bright Soviet Union], *Asahi Hyōron* 1 (6): 87-92.

LDP (1966) *Heiwa to zenshin no tameni* [For Peace and Progress]. Tokyo: Liberal Democratic Party.

Littlewood, Ian (1996) *The Idea of Japan*. London: Martin Secker and Warburg Limited.

Maruyama, Masao (1963) *Thought and Behavior in Modern Japanese Politics*. London: Oxford University Press.

Matsumoto, Shunichi (1956) *Mosukuwa ni kakeru niji* [A Rainbow to Moscow]. Tokyo: Asahi Shimbun sha.

Mendel, Douglas H. Jr ([1961] 1971) *The Japanese People and Foreign Policy*. Westport, CT: Greenwood Press.

MoFA (1980) *Gaikō seisho* [The Diplomatic Blue Book]. Tokyo: Ministry of Foreign Affairs.

MoFA website www.mofa.go.jp accessed on 02 September 2007.

Morimoto, Yoshio (1989) *Sobieto to roshia* [USSR and Russia], Tokyo: Kōdanasha.

Morley, James W. (1962) 'Japan's Image of the Soviet Union 1952-61', *Pacific Affairs* 35 (1): 51-8.

Morris-Suzuki, Tessa (1998) *Re-inventing Japan*. London: M.E. Sharpe.

Nagoshi, Kenr (1994) *Kuremurin himitsu bunsho wa kataru* [What the Kremlin's Secret Files Say]. Tokyo: Chūō Kōron sha.

Nakasone, Yasuhiro (1954) *Me de mita soren/chūkyō* [Eye witness to the Soviet Union/ Communist China]. Tokyo: Kenpō chōsa kai.

Nakasone, Yasuhiro (1983) 'Because of Expansion [We Risk] Being Isolated', interview in *Washington Post* 19 January: A12.

Nanbara, Shigeru (1955) *Soren to Chūgoku* [Soviet Union and China]. Tokyo: Chūō kōron sha.

NDL (National Library of the Diet) interpolations database at www.ndl.go.jp accessed on 2

Hosei University Repository

October 2006, 5 February 2007 and 26 August 2007.

Neumann, Iver B. (1998) *Uses of the Other: 'The East' in European Identity Formation*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

NIDS (2000) East Asian Strategic Review. Tokyo, The National Institute for Defense Studies; http://www.nids.go.jp/ accessed on 23 May 2008.

Oguma, Eiji (2002) *A Genealogy of 'Japanese' Self-images*. Melbourne: Trans Pacific Press.

Okazaki, Kazuhiko and Tadao Morimoto (1993) 'Tsuyoi roshia wa iranai' [No Need for Strong Russia], *Voice* 186: 84-93.

Panov, Aleksandr (2007) *Rossiya i Yaponia* [Russia and Japan]. Moscow: Izvestiya.

Rumelili, Bahar (2004) 'Constructing Identity and Relating to Difference: Understanding the EU's Mode of Differentiation', *Review of International Studies* 30 (1): 27-47.

Sakamoto, Yoshikazu (1959) 'Chūritsu nihon no bōei kōsō' [The Vision of Defending Neutral Japan], *Sekai* 164: 31-47.

Sankei Shimbun (1993) 'Nichiro kankei kaizen no tameni purojekuto de sōgo rikai o' [A Project Furthering Mutual Understanding for Improving Japan-Russia Relations], 14 October 1993. Tokyo. Electronic edition. Accessed on 23 January 2005.

Satō, Masaru (2005) *Kokka no jibaku* [State's Self-circumscription]. Tokyo: Fusosha.

Sekai (1956) 'Tsukurareta "kokumin kanjō"' [Created 'people's sentiment'], 131: 201-8.

Shiba, Ryōtarō ([1986] 2002) *Roshia ni tsuite-hoppō no genkei* [About Russia: The Original Form of the North]. Tokyo: Bungei shunjū.

Shimazu, Nakoko (2005) 'Love Thy Enemy: Japanese Perceptions of Russia', in J. W. Steinberg (ed.) *The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero*, pp. 365-84. Leiden: Brill.

Shimizu, Hayao ([1979] 1992) *Nihonjin wa naze roshia ga kirai ka* [Why do the Japanese Hate Russia?]. Tokyo: Yamate shobō shinsha.

Siddle, Richard (1996) *Race, Resistance and the Ainu of Japan*. Sheffield Centre for Japanese Studies/Routledge Series. London: Routledge.

Soren Kenkyū (1954) 'Nihon wa soren to chūkyō ni nani o nozomu ka' [What Japan Expects from USSR and Communist China] 3 (1): 2-16.

Special Committee on Textbooks Problem (1955) *Ureubeki kyōkasho no mondai* [The Deplorable Textbooks Problem]. Tokyo: Democratic Party of Japan.

Study Group on the Age of Culture (1980) *Bunka no jidai* [The Age of Culture]. Tokyo: Prime Minister's Office.

Stockwin, Arthur J. (1968) *The Japanese Socialist Party and Neutralism*. Melbourne: Melbourne University Press.

Takakura, Shinichiro (1942) *Hokuhen, Kaitaku, Ainu* [Northern Frontier, Pioneering, Ainu]. Tokyo: Takemura shobō.

Takano, Yuichi (1962) 'Hoppō ryōdo no hōri' [The Legal Aspects of the Northern Territories], in R. Taoka et al. (eds) *Hoppō ryōdo no chii* [The Status of the

Hosei University Repository

Northern Territories], pp. 193-250. Tokyo: Nanpō dōhō engokai.

Takemae, Eiji (2002) *Inside the GHQ: The Allied Occupation of Japan and its Legacy*. London: Continuum.

Tanaka, Stephan (1993) *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*. Berkeley, CA: University of California Press.

TD (Tanaka Database) 'The World and Japan', Institute of Oriental Culture, Univ of Tokyo, www.ioc.utokyo.ac.jp/~worldjpn/ accessed on 2 February 2007, 28 August 2007.

Tamba, Minoru (2000) 'Fukuganteki/jusō teki nichiro kankei kōchiku no tameni' [Towards multilayered and multidimensional Japan-Russia relations], *Gaiko Forum*, 13 (13): 36-41.

Tantoku, Saburo (1949) 'Atarashii soren: yokuryu seikatsu o tooshite' [The 'New Soviet Union' through the Detention Experience], *Hyōron* 29 (1): 18-33.

Togawa, Tsuguo (1993) Nichiro/nisso kankei no tokuchō [The Peculiarities of Japan's Relations with Russia/USSR], in *Nichiro 200 nen* [200 Years of Japan-Russia Relations]. Tokyo: Sairyūsha.

Tōgō, Katsuhiko (2007) *Hoppō ryōdo Kōshō Hiroku* [Confidential Files of the Northern Territories Negotiations]. Tokyo: Shinchōsha.

Wada, Haruki (1999) *Hoppō ryōdo mondai: Rekishi to mirai* [The Northern Territories Problem: History and Future]. Tokyo: Asahi Shimbun sha.

Watanabe, Mikio (1948) 'Soren no kazoku, kekkon, sono hōritsu' [The Soviet Family, Marriage and the Related Laws], *Horitsu shinpō* 749 (8/9): 8-10.

Yokote, Shinji (ed.) (2004) *Higashi ajia no roshia* [Russia of East Asia]. Tokyo: Keio University Press.